

## ゴジカラ村

### 取組のあらまし

取組団体 社会福祉法人愛知たいようの杜

取組内容 愛知県長久手市にある「ゴジカラ村」は、少子高齢化と地域コミュニティの希薄化に対応するために生まれた次世代型の多世代共生コミュニティである。ゴジカラ村は国の掲げる地方創生施策「生涯活躍のまち（日本版 CCRC）」の先行モデルの一つとして位置づけられており、全国の自治体や関係者から注目される先進事例となっている。

## 1 愛知県長久手市の概要

人口	61,512人	令和7年1月1日現在（住民基本台帳人口）
職員数	389人	令和6年4月1日現在（一般行政部門）
総面積	21.55 km <sup>2</sup>	令和7年10月1日現在（国土地理院「全国都府県市区町村別面積調」）

図表 1 長久手市 イラストマップ



出所：長久手市 ホームページ

## 2 取組の背景・目的

### (1) 取組の背景と目的

愛知県長久手市にある「ゴジカラ村」は、少子高齢化と地域コミュニティの希薄化に対応するために生まれた次世代型の多世代共生コミュニティである。創設者の吉田一平氏（前長久手市長）は、ビジネス社会で体調を崩し故郷に戻った際、故郷の雑木林が急速に宅地開発で失われていく様子に心を痛み、「長久手のふるさとの自然を守りたい」と考えた。この思いから、自身の先祖代々の山林約1万坪を活用して昭和56年に学校法人吉田学園による私立幼稚園「愛知たいよう幼稚園」を開園し、子どもたちが自然の中で伸び伸び遊べる場を提供した。しかし同時に、核家族化で地域から子供と高齢者が触れ合う機会が減っていることにも着目し、幼稚園児と地域の高齢者が交流する独自の試みを始めた。雑木林を自由に駆け回る園児たちを見守る役割を近隣の高齢者に依頼したところ、お年寄り達が子どもと接することで生き生きと輝き始め、この経験が子どもから高齢者まで全ての世代がお互いに関わり合い、役割と居場所を持てるコミュニティを実現することがゴジカラ村の理念となった。

「ゴジカラ村」という名前には、「仕事終わりの時間である『5時から』の時間に追われない暮らし」という創設者のメッセージが込められている。効率や結果を急ぐのではなく、不便で手間がかかってもよいから、ゆったりと人と自然を大切に暮らそうという理念であり、「のんびり、ぼちぼち、ほどほど、だいたい、適当に」といったスローガンに象徴される。このような価値観の転換を目指す暮らし方そのものが、高齢者にも子どもにも優しいコミュニティづくりの目的である。ゴジカラ村は国の掲げる地方創生施策「生涯活躍のまち（日本版 CCRC）」の先行モデルの一つとして位置づけられており、全国の自治体や関係者から注目される先進事例となっている。

### (2) 取組の経緯

- ・ 1981年（昭和56年） - 学校法人吉田学園により「愛知たいよう幼稚園」開園
- ・ 1986年（昭和61年） - 地域の高齢者福祉ニーズに応えるため、社会福祉法人愛知たいようの杜を設立
- ・ 1987年（昭和62年） - 特別養護老人ホーム「愛知たいようの杜」（定員50名）およびショートステイ施設を開設
- ・ 1991年（平成3年） - デイサービスセンター愛知たいようの杜を開設。
- ・ 1993年（平成3年） - 長久手市内に専門学校「愛知総合看護福祉専門学校」（愛称：もりのがくえん）を開校
- ・ 1998年（平成10年） - グループホーム「嬉楽家（きらくや）」開設。認知症高齢者の小規模ケアの場を整備。訪問看護ステーションも開設し在宅支援を強化

- ・ 2001年（平成13年） - 高齢者向けのケアハウス「ゴジカラ村」およびデイサービスセンター「ゴジカラ村」を開設
- ・ 2004年（平成16年） - ゴジカラ村役場株式会社を設立
- ・ 2009年（平成21年） - 小規模特別養護老人ホーム「だいたい村」（定員29名）を開設
- ・ 2012年（平成24年） - 創設者の吉田一平氏が長久手市長に就任（2010年に町長当選）
- ・ 2020年代 - 現在までに施設群の充実と運営体制の強化が図られ、ゴジカラ村モデルは42年の歴史を刻む（2023年時点）。国の表彰や先進事例調査の対象となるなど、対外的評価も得ている。

### 3 取組内容

#### (1) 施設の全体構成

ゴジカラ村は、雑木林に囲まれた約3.3ヘクタール（1万坪）の敷地内に、多様な世代が共生するための施設群を集約した複合開発である。構成要素は、高齢者向けの介護福祉施設一式（特別養護老人ホーム、ケアハウス、ショートステイ、デイサービスセンター）、幼稚園、子育て支援拠点、そして看護・福祉の専門学校であり、これらが一体的に併設されている。運営主体は複数にまたがるが、地理的には一つの村落のように施設が配置され、日常的に世代間の行き来や交流が生まれる空間設計となっている。

図表 2 ゴジカラ村根獄エリアの施設構成



出所：100年生活者研究所：雑木林が暮らしの座標軸。様々な人が自然と共に混ざって暮らす「ゴジカラ村」

敷地の開発にあたっては「雑木林が暮らしの座標軸」というコンセプトが貫かれている。雑木林の斜面に沿って複数の建物が分散配置され、各世代の生活空間が緩やかにつながっている。中心部には高齢者施設群と幼稚園が位置し、そこから徒歩圏内に専門学校や交流拠点が点在している。敷地内の動線は世代間の偶発的な交流を促すよう工夫されており、例えば園児が餌やりに訪れるヤギ小屋やウサギ小屋がデイサービス棟の近くに設けられ、高齢者が窓辺から子ども達の様子を見守れるようになっている。

また、建築的には木造平屋・低層の人間的なスケール感を大切にし、床や梁など内装にもふんだんに木材を使用することで、「村らしさ」と家庭的な温もりを演出している。

## (2) 主要構成施設の概要

### ア 高齢者福祉施設

高齢者向けの福祉施設群としては、特別養護老人ホーム（従来型多床室の「ハモリー館」（60床）とユニット型個室の「杜っと館」（40床））、ケアハウス「ゴジカラ村」（自立高齢者向けケア付き住宅、定員50名）、認知症高齢者グループホーム「嬉楽家」（9名×2ユニット）、短期入所施設（ショートステイ）、通所介護施設（デイサービスセンター「ゴジカラ村」）などがある。介護保険サービス事業所として地域包括支援センターも併設されており、在宅高齢者の相談支援やケアマネジメント機能も備える。

こうした多様な施設を揃えることで、要介護度や生活状況に応じた切れ目のない支援を実現している。実際、ゴジカラ村では「地域の高齢者が最期までこのまちで生活できること」を想定し、元気なうちはデイサービスや訪問看護等を利用しつつ自宅で暮らし、介護度が上がればケアハウスに入居し、さらに重度化すれば特養に移り住む、という段階的な住み替え体制を整えている。また、小規模特養「だいたい村」のような新しい試みも導入し、家庭的なユニットケアや地域密着型サービスにも取り組んでいる。

### イ 幼稚園・託児所

幼児教育・保育分野の拠点として、学校法人吉田学園が運営する私立幼稚園「愛知たいよう幼稚園」（通称：森のようちえん）が村内にある。1981年開園当初から雑木林の自然環境をフィールドに、子ども達が室内遊戯よりも外遊び中心で過ごすユニークな方針を採っている。坂道を駆け上ったり滑り降りたり、昆虫を捕まえたり木陰で休んだり、四季折々の自然体験が保育の核であり、生き生きとした子どもの育ちを支えている。

この開放的な保育環境で園児を見守るため、地域の高齢者がボランティアで「おじいちゃん・おばあちゃん先生」として参加している点が特徴である。園児にとっては異世代交流を通じた情操教育の場となり、お年寄りにとっては役割と生きがいを感じられる場となっている。

図表 3 森のようちえん



出所：健康長寿ネット

#### ウ 専門学校、愛知保健看護大学校

園児や高齢者の生活の場と隣接して、学校法人吉田学園が運営する専門学校（愛称：もりのがくえん）が立地している。看護師・介護福祉士等の養成を目的とした3年制および4年制課程を持つ専門学校であり、緑豊かな環境の中で日常的に高齢者や幼児と触れ合える学びの場として特徴づけられている。

#### エ 地域交流施設

村内には世代や地域を超えた交流を促すためのスペースが各所に配置されている。築200年古民家「ざわざわ」や「ほとぎ」がその一例で、高齢者と子ども、地域住民が自由に集えるコミュニティサロンの役割を果たしている。これら古民家には調理設備も備わっており、行事の際には餅つきや郷土料理づくりが行われ、世代を超えた交流の場となっている。特に「どんぐりの杜」では、有償ボランティアの高齢者スタッフが常駐し、子ども達のお世話や来訪者へのお茶出しなどを行っており、地域の寄合所さながらの温かな雰囲気醸成されている。

#### (3) 取組の推進体制

ゴジカラ村の運営体制は、複数の法人・団体がそれぞれの強みを生かし連携する形をとっている。すなわち、施設運営の中核として、社会福祉法人愛知たいようの杜と学校法人吉田学園、そしてゴジカラ村役場株式会社の3者が連携して事業を推進している。社会福祉法人愛知たいようの杜は介護保険事業の運営主体であり、特養・グループホーム・デイサービス・地域包括支援センター等を管轄して高齢者福祉サービス全般を担う。学校法人吉田学園は幼

稚園と専門学校という教育部門を担当し、子ども教育と人材育成の役割を担っている。そしてゴジカラ村役場株式会社は民間企業として、生きがい支援事業や介護保険適用外のサービス、村全体の維持管理などを手掛ける。

## 4 成果・課題

### (1) 成果

ゴジカラ村の取組は、地域に様々な好影響と新たな価値をもたらしている。まず、高齢者の心身の健康に大きな成果が見られる。子ども達や若者と日常的に接することで、高齢者が役割と生きがいを取り戻し、表情や意欲が改善した事例が数多く報告されている。

また、子どもたちにとっても、自然の中で思い切り遊べる環境と、お年寄りを身近に感じる生活体験は、現代の都会的な保育環境では得難い情操教育の場となっている。森のようちえんで育った子ども達は命の大切さや思いやりの心を自然と身につけ、「人と違う世代との関わり方」を小さい頃から学んでいと評価されている。

地域社会からの反応も極めて良好である。当初は「特養や福祉施設が林の中にできる」と聞いて不安を抱いた住民もいたが、蓋を開けてみれば子どもの声が響き、動物もいる賑やかな“村”が出現し、今では長久手市を代表するコミュニティ名所として親しまれている。視察等により、村内に延べ1,000人ももの人の流れが生まれたことで地域全体が活性化し、長久手市は全国的にも住みよき上位の自治体として注目されるようになった。

### (2) 課題

課題としては、財政基盤の確立があげられる。多岐にわたる事業を維持発展させるには安定した財政基盤が不可欠であるが、高齢者福祉・保育・教育と複数分野にまたがる運営には分野ごとに制度上の制約や財源の確保難がつきまとう。ゴジカラ村では株式会社の活用や多角経営で補完し合う仕組みを作っているものの、今後も利用者ニーズの変化や制度改正に柔軟に対応しながら収支バランスを取っていく必要がある。

人材確保も課題である。日本全国で介護・保育人材の不足が叫ばれる中、ゴジカラ村においても将来世代を担う職員を安定的に確保していく必要がある。同村には介護福祉士養成校があり、人材育成と確保に一定の強みを持つが、若年層の地元定着に引き続き取り組む必要がある。

## 関連・参考資料

---

長久手市ホームページ：

<https://www.city.nagakute.lg.jp/soshiki/shichokoshitsu/johoka/2/2/2408.html>

健康長寿ネット：お年寄りと子どもが雑木林の中でともに暮らす次世代型コミュニティ（愛知県長久手市（ながくてし）ゴジカラ村）

<https://www.tyojyu.or.jp/net/kaigo-seido/jirei/gojikaramura.html>

一般社団法人 JA 共済総合研究所：自然と共生し、多世代共生するゴジカラ村の取組み

<https://www.jkri.or.jp/PDF/2018/Rep159hamada.pdf>

100年生活者研究所

[https://hakuodo-rdc.com/100years\\_lab/posts/100news\\_240403/](https://hakuodo-rdc.com/100years_lab/posts/100news_240403/)

東京電機大学 未来科学部 建築学科 建築・環境計画研究室：プロジェクトカタログ「ゴジカラ村」

[https://pjcatalog.jp/wp-](https://pjcatalog.jp/wp-content/uploads/2020/12/0102.%E3%82%B4%E3%82%B8%E3%82%AB%E3%83%A9%E6%9D%91.pdf)

[content/uploads/2020/12/0102.%E3%82%B4%E3%82%B8%E3%82%AB%E3%83%A9%E6%9D%91.pdf](https://pjcatalog.jp/wp-content/uploads/2020/12/0102.%E3%82%B4%E3%82%B8%E3%82%AB%E3%83%A9%E6%9D%91.pdf)